

筑波医療科学

Tsukuba Journal of Medical Science

On-Line Journal

URL <http://www.md.tsukuba.ac.jp/public/cnmt/Medtec/journal.htm>

TJMS 2019; 15(2): 1-4

ロシア語圏海外医療視察研修



筑波医療科学 第15巻 第2号

Tsukuba Journal of Medical Science

Volume 15, Issue2 (2019, September)

【目次】

ロシア語圏海外医療視察研修に参加して	・ ・ ・ ・ 1 - 4
医療科学類 1年 白井優花	

ロシア語圏海外医療視察研修に参加して

医療科学類 1年 白井優花

ロシア語圏海外医療視察研修に参加してロシアという地の文化や人々に触れることが出来たこと、またこの研修の大きな目的である日露間の医療の現場や制度、医学教育の共通点や相違点を目の当たりにしたことは自分にとって最大の収穫であり今後の人生において少なからず良い影響を与えるであろう。

本報告では特に医療の面に焦点を当てたい。まず最初に訪れたカザンではカザン連邦大学附属病院と医学部を訪問した。附属病院は診察、外科、入院など、それぞれの目的によって病院を分けていて、地域の中で施設、医師ともにトップレベルである為、基本的には周辺地域に住む人々のための病院ではあるが遠方から足を運ぶ患者さんもいるという話だった。この附属病院を改革していくにあたり、日本の病院を参考にした点が多くあるという話も頂いた。具体的には、採血場で横長の机で患者サイドと病院スタッフサイドに完全に分け、病院スタッフ側の行き来をしやすくしたり、患者さんが検体の置いてある側へ侵入できないようにすることで取り違え発生を防いだりすること、また検査室の隣にトイレを設置して患者さんが尿、便採取を病院でできるようにすること、などである。説明いただいた中で印象に残っているのは全診察室の同一化と予約システムである。診療室は横並びに設置されており、全ての部屋が廊下で繋がった構造をしていて医師が同僚のところへ容易に行き来することができるようにすることで診察

する上で相談したいことがあった時に役立つようになっている。また同じ医師が毎日同じ診察室で患者さんを見るわけではないので全ての道具やコンピュータの位置など全て部屋の造りを同じにしてどこで診察することになっても支障が出ないようにしている。予約システムについては、附属病院ともなると訪れる患者さんの数もかなり多く待ち時間も相当なものになることから予約専用のアプリケーションがあり、そこから日時、医師を選択することができる。また病院に来たことを医師が把握できるように到着したらその旨を伝えることのできるようなシステムも導入されているそう。日本の病院と比べて特に進んでいる点は実際あまりないのだが病院のシステム等日本と異なる点が多々あることや日本の病院を参考にして作られたものがあると知った上で病院見学ができたのはとてもいい経験になった。

附属病院を訪れた翌日と翌々日、今度はカザン連邦大学を訪れ、そこでは現地の医学生とシミュレーションセンターで様々な状況を想定した実習を行った。WETLABにて microsurgery の体験をし、人工血管についての説明を受け、現地学生と日露の医学教育等についてプレゼンテーションをしあったりした。実際にシミュレーションセンターで行ったのは出産時の胎児の向きや位置を確認する方法、注射の一連の流れ、胎児・成人に対する気管挿管、緊急時の応急処置法、心肺蘇生法、パナナを使っての外科的な縫合練習である。これらは日本にいたら実習生であっても経験するかしない

かのレベルのことで、1年生の時にこのような実践的な体験ができたのはとても刺激になった。基本的には医学生向けのものだったが、医学医療を学ぶ1人として知っていて損は無い。緊急時の応急処置法は知っていてもなかなか行動を起こせないこともあると思うのでこの機会に一連の流れを学ぶことができたのは自分にとっても大きいと感じた。将来病院で検査技師として働くかは未定だが、患者さんが検査中に急変する場合も十分にあり得る。そんな時、気管挿管は医師にしかできなくてもエアウェイなどを用いた応急処置で患者の気道を確保すること、CPRを施すことは自分にもできることなので本当にいい経験ができた。

このようなシミュレーションセンターでの実習に加え、WETLABで現地の学生はmicrosurgeryの練習をしていると説明を受けた。最初に聞いた時、そういったことは上級生向けのものなのだろうと思っていたが、自分がやろうと思えば1年生の頃からこういった練習をすることができるそうだ。ただ技術を練習するという目的だけでなく、1年ごとにある研究レポートに応じて自分の研究に必要なことを動物を使用して自らが手術を行い研究していくそうだ。日本では医学部に入学して1年目からこのような実践的な学びをすることはほぼ無い。このような教育方針は学生のモチベーションの向上に繋がり、交流したロシア人学生達の意識が高いのにも納得できた。



<シミュレーションセンターにて>

モスクワに移動した後は、ロシア国立研究医科大学、在ロシア日本大使館、ロシア国立研究医科大学提携小児科病院、モスクワ市立教育大学、モスクワ第一医科大学の日露循環器病画像診断トレーニングセンター、モスクワ国立大学医学部、そして Russian Clinical and Research Center of Gerontology を訪問した。その中でも特に印象的だったのは大使館でのこととモスクワ第一医科大学の日露循環器病画像診断トレーニングセンターでのことである。

大使館では、駐在医務官と看護師さんによる講義を受けた後、私達からの質問に答えて頂いた。医務官と言われても実際のところ何を日々行っているのか知らなかった。医務官の主な業務として、在外公館に勤務する職員及びその家族に対する日常的診療、現地医療情報の収集並びに報告、法人援護業務の医療面での側面支援、そして任地外での大規模自然災害やテロ事件発生時の側面支援が挙げられる。臨床現場から離れた事務的な業務が主で、医師ではあるが医師らしい仕事はほとんど

しないようだ。また、ロシアの医療事情についても講義を受けたが、ロシアの地理的要因（乾燥、低温、短い日照時間）による冬季うつ、ビタミンD不足（紫外線を浴びることによって生成されるものであるため）があるということ、アルコール中毒や喫煙者が多いことが大きな問題であることが分かった。

感染症の問題も多くロシアでは問題になっている。HIVの新規感染者は日本が年間1400人なのに対してロシアでは8万人以上で累計では人口の1%弱である100万人以上。また結核患者も日本の3倍で、年間約6万人だそうだ。まだまだ抱える問題が多いロシアだが一方で問題が改善されてきている点もある。ロシアでは政府が国を挙げて季節性インフルエンザの流行を最小限に留めようと無料でワクチン接種を推奨した結果、人口の約50%が予防接種を受け、感染したのは4万人に留まったそうだ。この無料ワクチン接種は地下鉄の駅やデパートなど人々が集まるような場所にテントを設置し、気軽に受けられるようにしたという。こ



<大使館にて>

のような政策は日本も是非参考にすべき点であると感じた。

医療職の社会的ステータスの問題もとても興味深かった。最近ではかなり待遇が改善されてきているがつい数年前までロシア国内における医療職の社会的ステータスはとても低かった。驚くべき事に、飲食店の従業員やバスの運転手の方の収入が良かったのだ。かつて医師の社会的ステータスがここまで低かった原因としては、ソ連時代に国策として医師と看護師を大量養成するにあたり、十分な教育を行わずに資格が与えられたことが挙げられるそうだ。

モスクワ第一医科大学の日露循環器病画像診断トレーニングセンターでは、大学で選抜された特に優秀な学生達が少人数で担当の先生から画像診断の指導を受けられる教室が設置されていた。病院の方では、血管造影診断や画像診断を行うためのMRIや乳がん検診用のマンモグラフィー、また撮影したデータの処理を行う最新コンピュータが充実しており、それらは日本が医療支援として提供したものであるとのことだった。日本政府がロシアに対して医療支援を行うということはニュース等で聞いたことがあったが実際に現地の病院で日本とロシアのつながりを見られたことに感動を覚えた。また、来年度を目安に病院内の学生の勉強用と臨床現場の診断用全てのフィルムをデジタル化し、データを一つのコンピュータに集約して患者データの共有が医師間で容易にできるようにする動きがあるとの話もあった。

全体を通してこの10日間ロシアの文化から医療

事情まで本当に様々なことを学び、とても内容の濃い1日1日を過ごせたように思う。将来どんな進路を選ぶにしてもまずは社会のこと、日本のこと、世界のことを知っていることが前提であり、その知識は豊富であれば豊富であるほど良い。この研修に参加したことでロシアという国に以前より親しみを覚えることができた。こういった異文化体験は将来どこかで役に立つように思う。

医療の側面でいうとロシアではまだまだ問題点が多く残されているが1つ1つ政府が、また現場が改善しようと動いているように感じた。地位の高い先生方が次の世代を鍛えようとしている様子も各病院、大学で見受けられた。今まで全く知らなかったロシアの医療事情を今回の研修を通して少しでも多く知ることができたことは自分の日露以外の国の医療事情に関する興味も引き立て、医療の世界に対する視野が広がったように思う。これから学年が上がるにつれ勉強する内容も専門性を増してくるが、そんな時こそ1つのことにとらわれず時々マクロな視点で物事を捉えて世界全体の問題に目を向け、自分が学んでいることを生かして他の人とは少し違った形で世に貢献することはできないか考えることを忘れないようにしたいと感じた。

筑波医療科学 第15巻 第2号	
編集	筑波医療科学 編集委員会 磯辺智範 二宮治彦
発行所	筑波大学 医学群 医療科学類 〒305-8575 茨城県つくば市天王台1-1-1
発行日	2019年9月12日